≪シンポジウム≫

いのちの尊厳

シンポジスト：
哲学から見た「いのち」：
保呂篤彦氏（客員研究員　筑波大学教授）
仏教から見た「いのち」：
石上和敬氏（客員研究員　武蔵野大学准教授）
真宗から見た「いのち」：
渡邊了生氏（客員研究員　相愛大学講師）
コメンテーター：青木新門氏（作家）
コーディネーター・司会：
桃井信之氏（客員研究員　元岐阜聖徳学園大学助教授）

司会

シンポジウムに先立って青木先生がお話くださいましたように①、いのちに関する現代の諸問題は、ずいぶんと前からたくさんの事が指摘されています。そのうちの１つに、お話の最後の方にありましたが、凶悪犯罪の低年齢化の問題に関わって、「神戸連続児童殺傷事件」の“酒鬼薔薇聖斗”と名告る少年が起こした犯罪あたりから若い子供たちがいわゆる凶悪犯罪を起こすようになったということがあります。先生のお書きになった本や、以前の講演会などでお聞きしたことですが、酒鬼薔薇聖斗がなぜあのような恐ろしい事件を起こしたのか、それは「死」というものを知りたかったと先生はお話しされていました。つまり、あの少年はおばあちゃんが大好きだったのに、両親の都合でおばあちゃんに会うことが出来なくなったと。そして、私の最も愛するおばあちゃんが亡くなってしまった。おばあちゃんを奪った死というものは何か、そのことを知りたくて昆虫を刻んでみたり、それで済まなくなり、犬や猫のいのちを奪ってみたり、それでも済まなくて人

間の首を斬った、というようなお話であったと思います。つまり、彼は死というものを知りたかった。私たちが死というものを知りえないような、実体験できないような社会の中に生きているから、このようなことが起こってきたのだということです。それは、私たちがいのちの見えない時代を生きている、ということの１つの象徴的な出来事ではなかったかと思います。

ところで、皆さまのご記憶にもあると思いますが、宮崎県で牛の口蹄疫が問題となり、全国的規模へと拡大していきました。私は北海道の十勝というところに住んでいます。周りには酪農家もたくさんいます。その事件が起こったという時から、北海道の農場の入り口には石灰が撒かれました。宮崎で起こったことですが、全国的に拡大した問題です。その時の報道で、とても気になった表現がありました。それは、何十万頭の家畜が「殺処分」されたという言葉です。殺処分という言葉は、ここで普通に使うような言葉だったのだろうか、と思い直したわけです。殺処分という表現は、確かに事実であるでしょうが、いのちということに関して、それこそ人間の都合からしか考えられていないということを確認しうる１つの表現ではなかろうかと思います。しかし、それが現代社会を生きる私たちのいのちの価値観として当然だというように、固定化されて受け止められているのではないかと思ったわけです。

少し分かり易い例を挙げますと、学校給食の際に、「いただきます」という言葉を子供たちに言わせないで欲しいという親御さんが出始めていると聞きます。親御さんが何故そのように主張するかといえば、それは、自分たちが働いたお金で給食費を納めているのだから、もう「いただきます」と言う必要はないのだと、ましてや手を合わせるなどということは気持ち悪いからやめてくれ、ということです。皆さま方はこのことをどのようにお考えになるでしょうか。私は、簡単に納得することはできません。お金の問題ではないと思います。大きないのちの犠牲、多くのいのちの犠牲の上に私のいのちが成り立っているということへの感謝、あるいは、人間という存在の罪深さを自覚する言葉として、「いただきます」と日本人は伝統的に言ってきたのではないかと思います。いのちが見えなくなってきているのだと思います。この親御さんのように、

給食費を納めているのだから、という理屈を突き詰めていけば、そのお金がしかるべき所に渡らなければならないことになります。しかし、お金が渡るのは、食糧生産者であったり、流通業者であったり、そのような人や場所にお金が渡るということがあったとしても、食べられる牛や豚や鳥や魚に渡るわけではないのです。米や麦などに渡るわけではありません。ただ私たちのいのちを長らえるために犠牲になっているということでありますが、そのいのちにまで眼が至らない、という社会になっていることが、学校給食に「いただきます」と言わせるなというような現象として表れているのではないでしょうか。

いずれにせよ、いのちが見えない時代になっているから、様々ないのちの問題が起こっているということになるのだと思います。本日は、先ほどご紹介にありました、哲学の立場から保呂先生、仏教学の立場から石上先生、そして、浄土真宗の立場から渡邊先生にパネリストになって頂きまして、いのちに関するシンポジウムを進めて参りたいと思います。

いろいろな問題がありますが、いのちに関わる問題。少し大きな枠で言えば、地球環境問題・環境破壊の問題、あるいは、生命倫理の問題、人権とか差別に関わる問題もいのちの問題でしょう。あるいは平和の問題もあると思います。平和や非戦の問題を取り上げて見ましても、有史以来、戦争という問題は無くなっていません。これだけ戦争の悲惨さやいのちの問題が叫ばれている時代にあって、アメリカをはじめ、世界各国には“軍事産業としての経済”という部分が存在しています。それは軍事的なバランスを取るための抑止としての意味合いに止まらず、結局は戦争が起これば経済が回るということになるわけです。これは適切な表現ではないかもしれませんが、“適度に戦争がないと困る”というような人たちがいるという経済や社会の構造になっているということです。大きな矛盾を抱えた社会の中に私たちはいま生きているのだということです。ですから、どのような問題も解決に至る方途を見つけるということは大変に難しいことだと言わざるを得ません。しかし、私たちにできることもあるはずですし、少しでも今の私たちに可能なことをこのような機会に明らかにしていくことができたらという願いをもっております。

なるべく分かり易く、何が問題で、どこをどのようにしていけばいいのかということを少しでも具体的に、踏み込んだ話し合いが出来ればと思っています。

保呂篤彦氏

このシンポジウムのお話を頂いた時に、何を要求されたのかと申しますと、いま司会の桃井先生が仰ったように、「哲学の立場」から「いのち」を定義せよということ、そして、その定義に沿って「いのち」に「尊厳」があることを明らかにせよということです。さらにその上で様々な生命問題について具体的な提案をせよとも求められました。しかし、そのようなことはできませんというのが私のさしあたりの答えです。

まず「哲学の立場」ということですが、そのような立場は存在しません。しかし、「いのちの哲学」、つまり「生の哲学（Lebensphilosophie）」という一つの流れは存在します。この「生の哲学」において「いのち」というものは、思惟や理性の根底をなすものであり、根本事実だとされます。ですから、「いのち」は極め尽くすことができない。思惟や理性がそれを基礎づけることはできない。理性の法廷で裁けるものではない。「いのち」は「いのち」自身から理解すべきであると。このように、「いのち」の定義自体に否定的な態度を取っているわけです。定義というものは、定義していますとますます話が抽象的になってしまう場合があります。「いのち」の現場に携わる、そのような場面に直面することが大事で、そうしなければ「いのち」は分からないと仰った青木先生のお言葉とも共鳴する見解だと思います。

では、どのように話をしていけばいいのでしょうか。今回私は次のようなことを考えてきました。私たちは、以上のことにもかかわらず、「いのち」のことが分かったような顔をして議論をしているのではないか。それなら、まず、私たちは「いのち」という言葉をどのように使っているのかということから振り返ってみてはどうだろうかということです。それが資料の 2 番目の「いのちの諸相」というところです。

資料の冒頭には「生物学におけるいのち」と書きました。これは聞きかじりでしかありませんが、生物学において「いのち」がどのよう

に考えられているのかということです。もちろんこれは、１つの立場、１つの方向からの話でしかありません。生物学においては「いのち」を「代謝」と「生殖（遺伝）」という２つのポイントから理解しているそうです。「代謝」というのは、私たちの個体としての「いのち」に焦点を合わせた理解です。「生殖」というのは、自らが自らとは異なる別の個体を生み出すという継続・持続という側面を捉えたものだと思います。生物学では「いのち」を「個」と「個を超えて継続するもの」という２つの面から捉えているということです。

それでは一般の人たちは、「いのち」ということを聞いた時にどのようなイメージを持ち、どのように使用しているのでしょうか。これについては、森岡正博氏が行った調査（MORIOKA, Masahiro, "The Concept of Inochi: A Philosophical Perspective on the Study of Life", in: *Japan Review*, 1991, vol 2 , pp.83-115.）を参考にさせて頂きました。結論を言いますと、森岡氏が分析した日本人一般が抱く「いのち」の概念というものは、生物学が挙げている定義と表面的にはそれほど異なりません。一方で、有限な個々の生命体において捉えられる側面と、それを超えて無限につながっていく側面とを合わせ持っているというのが森岡氏の結論です。この両側面は、ギリシャ語では「ビオス」と「ゾーエー」という２つの言葉で表現されます。「ビオス」とは、個の「いのち」を指し、「ゾーエー」とは、連続する「いのち」を指すそうです。ただ一般の日本人が抱く「いのち」理解は、その中を見ていきますと、生物学でいう２つの「いのち」に対する捉え方とは、必ずしも一致しない点を含んでいるように思います。生物学の２つの側面の「生殖（遺伝）」に近いのが、私の「いのち」は私の祖父母、父母を通して受け継がれ、私も子供たちを通して孫、子孫の世代へとつながっていくものだという理解でしょう。しかしながら、ここでの「いのち」のつながりの側面はそれだけには限られていません。

資料の方には、「いのちの広がり」と書いておきました。特に継続する側面、つながる側面が、親子であるとか、生殖や遺伝でつながるだけではなくて、私たちは食べることによって生命を保つことができるわけですから、他の動植物の「いのち」とつながっているということ

です。このような理解は異なった側面ではないかと思います。

さらにその広がりについて言いますと、その動植物は必ずしも他の生命体を食べることによって「いのち」を保つというだけではありません。水や空気や太陽光といったものが存在しなければ、「いのち」の繋がりも可能にならないということであれば、さらに「いのち」が広がっていきます。それは皆さんもご存じの「生態系」ということでもあります。それがもっと拡大されれば「地球生命」みたいなものになってくると思います。

そしてさらに見ていきますと、当たり前と言えば当たり前ですが、祖父母を通して、父母を通し、私を通して子供たちに伝わっていくというところに、すでにかけがえのない個の「いのち」という価値、精神的な生命といいますか、そのようなものが3つ目の要素として含まれてくるだろうと思います。かけがえのない個の「いのち」。このかけがえのない個の「いのち」をかけがえのないものとしているような、人間同士の精神的、人格的な繋がりとしての「いのち」という側面があるだろうと思います。そのように見ることができると思います。

それに加えて、「諸宗教におけるいのちをめぐる言説」ということに目を向けていくと、これまで話してきた「個」と「個を超えるもの」という範疇では捉えられないような側面が見えてきます。キリスト教にしても、仏教にしても、それぞれにおいて「いのち」に関する言説を有しているわけです。

私の知る限り、キリスト教においても、仏教においても、否定され克服されるべき生の側面と、それを克服することによって得られる喜ばしい、望ましい肯定的な生の側面といったものが出てきているように思います。キリスト教であれば、「古い人を脱ぎ捨てて、新しい人を着る」といった表現がされます。そして、キリスト教の重要な概念ですけれども、「復活」というようなことが言われます。このような考え方には、2つの「いのち」の相が含まれているでしょうし、さらにそれを超えて「永遠のいのち」といった相が考えられていると思います。仏教については、この後、先生方から詳しく教えて頂けることと思いますが、いま私が聞き及んでいることを申しますと、「生老病死」を苦として捉えている「いのち」の相があり、それを超える「仏のいのち」

というものがもう一方で考えられていると。つまり、仏教においても「いのち」に2つの相が考えられているだろうと思います。

私たちが「いのち」ということを考える場合には、多くの方が生物学に関しても、仏教に関しても何らかの形で知っているわけです。ですから、私たちが「いのち」ということを考える場合、これらの視点が何らかの形で含まれているだろうと思います。

その上で、「いのちの尊厳」ということですから、そのことにも触れておきたいと思います。今回取り上げられたことは、広い意味での「生命倫理学（bioethics）」の問題だろうと私は捉えています。そこで「バイオエシックス」のことを少し考えてみました。初期の「バイオエシックス」に「尊厳」という概念を持ち込んだのは、キリスト教の立場に立つ研究者であったと言われています。厳密に言いますと、この「尊厳」は“sanctity of life”という言葉で語られ、最近は「神聖性」という訳語があてられるようになっているものです。これはキリスト教の立場から導入されているものですから、元々は、人間の「いのち」に限定されて用いられていまして、人間は「神の似姿（imago Dei）」ということでして、他の「いのち」とは区別される特別な価値を有するのだというのが、本来的な考え方になっています。この考えの重要なバリエーションで、現在、「バイオエシックス」と呼ばれる分野において扱われる「尊厳」概念のもとになっているのは、おそらく18世紀のドイツの哲学者であるイヌマエル・カントが語った「人格の尊厳」という概念だろうと思います。この「尊厳」はドイツ語では“Würde”と言い、英語では“dignity”です。これは人間を「人格」として捉えて、この「人格」というものは「物件」とは違うとします。「物件」は単に「手段」として用いることが許されるけれども、「人格」はそれ自体が「目的」であって、単に「手段」として用いることができないものだと考えられています。単に「手段」として用いられるものは、他のものと「手段」としての有用性が同じであれば、取り替えることができるわけですから、それに見合った「価格（price）」を持っています。「人格」についてはそうではないので「価格がつけられない（priceless）」のだと。そのことを言い換えて、「尊厳」を有しているのだ、他のものと取り替えられないのだと言ったわけです。この2つの「尊厳」というのが

「バイオエシックス」の中で用いられる「尊厳」という概念の基になっていると考えることができます。

では、その後この「尊厳」ということが「バイオエシックス」の中で、素晴らしい理解の仕方だというように言われてきたのか、キリスト教徒はいいことを言ってくれたねと言われてきたのかというと必ずしもそうではありません。

その問題について少しお話したいと思います。医学研究者の中には、このような「尊厳」とか、「神聖性」という概念を研究の場に単純に持ち込むことに嫌悪感を示す方もいます。彼らは、人文学の研究者が、自然科学研究あるいは医学研究を妨害するためにこの概念を振りかざしているにすぎないのだと主張します。没価値的な科学研究にのみ自分の立ち位置を定める研究者からすれば、「尊厳」概念に待ったをかけられるというのは迷惑な話だというのも理解できます。そこまで言わないにしても、「尊厳」概念というものが、「いのち」をめぐる倫理的問題の議論を一撃で終わらせてしまうような働きを持っているということを批判する方もいます。「尊厳」というものを最高の価値だと考えると、その根拠を示すことが非常に困難ですし、その上で「尊厳」というものが不可侵性を意味すると解釈されると、確かに議論を一撃で終わらせてしまうという機能を持っているということも理解できます。

さらにもう少しいきますと、「尊厳」というものは内容が不明確だという批判も存在します。先ほど言いました「神聖性」という概念は、「いのち」はそれぞれの質に応じて取り扱いを考えるべきだという議論に対抗するものとして導入されたと思われます。ところが、カントが行ったように、「尊厳」というものを「人格」という、「いのち」のある種の質と関連させるならば、「尊厳」は本来有していた意味を失っていくようにも見えます。例えば、同じように「人格（パーソン）」という概念を用いながら、何が「パーソン」なのかといったことを考える際に、自己意識能力とか対応能力というものに、その基準を置く場合があります。そうして、胎児とか、場合によっては新生児を「人格」ないし「パーソン」から除外して、選択的人工妊娠中絶とか、障害を持った新生児への治療中止とか、そのような問題を何とか正当化しようとする議論が生

れます。英語圏の「バイオエシックス」における「パーソン論」といったものは、「尊厳」という概念を用いながらその本来的な意味を失ってしまった典型的なケースではないかと思います。

「尊厳」概念がこのような理解の方へと進められていくと、結局はどのようなものでも「尊厳」ありとされてしまう危険性もあるだろうと思います。私はそのような事態を「尊厳バブル」とでも呼んだらどうかと思います。どのような「いのち」に「尊厳」があるのかということが、全く恣意的に決められてしまう可能性があるということです。まったく自分の思い通りにならない人生を生きる「いのち」は、人間の「いのち」として「尊厳」がないのだから、とっとと死なせてくれ、といったものにまで「尊厳」概念が使われかねないということです。

「尊厳」概念については、「尊厳」の所在に関して2つぐらい大きな問題があるだろうと思います。1つは、もし「尊厳」を有するものが個々の生命体だとした場合、つまり「尊厳」の所在は「個」だ、“individual”だとした場合、その「尊厳」を有する“individual”は人間に限られるのか、あるいは人間を超えた他の“individual”な生命体も「尊厳」を有すると考えるのかという問題です。先ほど言いました「パーソン論」というのは、自己意識能力とか対応能力とかいうある種の生物の能力に「人格」の基準を置きます。人間の赤ちゃんに自己意識能力というものは欠けているかもしれません。しかし、よくテレビなどに登場する自動販売機にコインを入れて飲み物を手に入れることのできるチンパンジーは、当然「人格（person）」であると考えなければならなくなります。そうすれば種を超えて、ある能力を持った生命個体というところにまでこの「尊厳」を広げることができるわけです。しかし、このような理解で果たしていいのかという問題もあるでしょう。さらに、そのような能力に限らず、すべての生物個体について「尊厳」が存在するのではないかというように議論を進める可能性もあるかと思います。

もう1つの問題は、では「尊厳」を有するのが「個」に限定された「いのち」だけではなくて、むしろ個体を超えて「いのち」そのものに「尊厳」を認めることができないだろうかということです。例えば、私たちが遺伝子を操作するということで、現在存在しないような生物種

をこの世界に新たに生み出すという時に、私たちが何らかの畏れを感じるならば、それは個々の生命体に感じているというよりは、「いのち」そのもの、生命そのものに対してある種の畏敬を感じているのだと見ることができるかもしれません。そうすると、「個」を超えた「いのち」そのものが「尊厳」を有するといったような考え方ができるかもしれないと思います。

最後に、この発表で私が何を言おうとしているのかをまとめて言いますと、大したことではないのですが、「生命倫理学（bioethics）」というものの具体的な中身を見ていきますと、環境倫理学であるとか、医療倫理学であるとか、生物学・医学の研究倫理であるとかが、まさに「いのち」に関する問題を議論する学問分野になっているわけですが、どうもそれぞれの場で議論される時に、先ほど私が言いましたように、私たちが分かったように思って「いのち」の問題を議論しているという状況が、「生命倫理学」を論じる現場の研究者たちにも当てはまっているのではないかということです。「いのち」とは何かといった時に、実は分かっていないのだけれども、分かったような気になって、つまり無自覚にどこかの立場に定位して、それに基づいて「尊厳」といったものについて言及してしまうということがあるのではないかと思います。

例えば、環境倫理学ですと、「いのち」の広がりの相ということが環境倫理学を論じる際の関心の中心になります。そうすると「個」の「いのち」の側面といったものが、視界から消えていってしまうのではないでしょうか。環境倫理学の言葉に「環境ファシズム」というのがあります。私たちはこの自然環境の中でしか生きられないにもかかわらず、環境を破壊しながら自分の「いのち」をつないでいる。生態系を維持する行為が正しい行為で、生態系を破壊することが悪い行為だとするならば、人間は悪い行為をしていることになります。ある人間と野生の生物がいて、どちらを犠牲にするかといった時に、生態系にどれだけ寄与したかということを基準にして判断すれば、人間はマイナスですから、それならばヘビを助けて人間を殺しましょうというような議論を展開する。このような「環境ファシズム」の立場に立つ生命倫理学者が出てくるということになります。それは、「いのち」のどこ

を見ているのかといった時に、非常に無自覚にある面だけを見ていて、そこから「尊厳」というものも考えているのではないかと思われます。

もう１つ、医療倫理学ということになると、ごく自然なことですが、対象はまさに何らかの病気を患っている患者という個人になりがちです。その際には当然、「いのち」の「個」の相が中心になります。それを超える「いのち」の相というものは、いつの間にか視界から消えて、しかも「尊厳」というものが、「個」だけが持ちうるものであり、「個」が現に持っているものだという見方だけに陥ってしまう危険性があるのではないかと思います。

要するに、「いのち」の特殊な相だけに意識を向けるのではなくて、もっと様々な相があることを考えて、それを自覚にもたらした上で、それぞれの問題を議論するべきではないかということです。「バイオエシックス」には、成立当初キリスト教を中心とした貢献がありました。ところが基本的に「バイオエシックス」というのは、例えば、現に病院内で起こっている問題などに指針を出して実行するための議論として展開されてきたわけです。何とかして多くの人の合意を得るということがその目的であったために、その後はキリスト教という特殊な立場からの言及というものはなるべく避けようということで、非常に世俗的な学問として発展することになりました。したがって、キリスト教はもちろんのことですが、仏教の立場からの「いのち」に対する理解というものなども、現在の「バイオエシックス」にはほとんど反映されていないと言っていいと思います。ですから、これから先、「いのち」の様々な相を考える場合、仏教からの貢献というものも当然重要になってくると思います。一面的にならないということで、極めて重要な貢献ができるだろうと考えているところです。

司会

保呂先生からは、「哲学から見たいのち」ということでお話しいただきました。少し難しいお話もあったかと思いますが、恐らく私が思うところでは、いのちの問題といっても見る角度から、視点から異なってくるのだ、ということだろうと思います。私たち一人ひとりの頭の中においても様々ないのちの見方があるのであって、このような議論をする場合には、まず頭の中を整理しなければならないのだというこ

とではないでしょうか。特に「いのちの諸相」という箇所で先生が仰ったように、いのちを見る時に、生物学的に見る場合もあれば、そうでない場合もあるのであって、現代社会に生きる私たちの中にも、いのちに関する定義が混在しているということをまず理解する事が必要であるということです。

これは保呂先生がおっしゃったこととは少しずれてくるのかもしれませんが、環境問題に取り組んでいけば、個のいのちがどこかでないがしろにされてしまい、いわゆる環境ファシズムのようなことになってしまう。あるいは、医療倫理学においては、個のいのちばかりを重視するようになってしまうのだということです。

このような問題を踏まえながら、後にもう一度議論していきたいと思います。

では続きまして、「仏教から見たいのち」ということで石上先生にお話を頂きたいと思います。

石上和敬氏

「仏教から見たいのち」という場合、仏教という何か１つの教学というものがあるように感じられるかもしれませんが、そうではありません。この後、渡邊先生が「浄土教・真宗から見たいのち」ということでお話を頂くわけですが、インド、中国、日本において仏教というのはいくつかの宗派に別れて展開してきています。日本の場合でも、宗派ごとの理解というものがあります。インドでも中国でも同じです。ですから、そのようなものをひっくるめた仏教一般というものが何かあるようなイメージを持ってしまいがちですが、実は現実にはそのようなものは存在してこなかったということになります。仏教のどの伝統に着目するのかによって「仏教から見たいのち」ということの切り口がかなり変わってくるのだろうと思います。このことを最初に申し上げておきたいと思います。

その上で、本日はどこに着目してお話をしていくのかといえば、聖徳太子です。聖徳太子は、こちらの学校とも関係があります。聖徳太子の制定された「17条憲法」というものがあります。その第２条に

「二に曰、篤く三宝を敬え。三宝とは仏法僧なり」という有名な文言があります。それに引っかけてというわけではありませんが、お配りしたレジュメに仏教の3つの宝である「仏法僧」に帰依していくという三帰依文というものがございます。これは日本の仏教の多く宗派が大事にしているご文です。

本日は、日本の仏教徒が宗派を問わず、広く慣れ親しんできたこの三帰依文を1つの手掛かりに「仏教から見たいのち」ということを考えてみたいと思います。先ほど、保呂先生のご発表の資料の中で、「仏教は生老病死から仏のいのちへ」と書いてあります。私の発表は、基本的には保呂先生のこの内容を少し敷衍させて頂きながらお話しするようなことになります。

> 人身受け難し、今すでに受く。仏法聞き難（がた）し、今すでに聞く。この身今生にむかって度せずんば、さらにいずれの生にむかってかこの身を度せん。大衆もろともに至心に三宝に帰依したてまつるべし。
>
> > 自から仏に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大道を体解して、無上意を発さん。
> > 自から法に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、ふかく経蔵に入りて、智慧海のごとくならん。
> > 自から僧に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大衆を統理して一切無碍ならん。
>
> 無上甚深微妙の法は、百千万劫にも遭遇（あいあ）うこと難し。わ我いま見聞し受持することをえたり。願わくは如来の真実義を解したてまつらん。

三帰依文の中心は、「自から仏に帰依したてまつる」、「自から法に帰依したてまつる」、「自から僧に帰依したてまつる」という3つになります。しかし、本日はその前後の文言に注目してみたいと思います。

まず、初めの2行について考えてみたいと思います。最初に「人身受けがたし、今すでに受く」とあります。この場合の「人身」とは、「人のいのち」というように理解いたします。仏教が興こったインドで

は、輪廻転生という考え方が、前提としてありまして、生き物である生類はその行為の善し悪しなどに応じて天の神々の世界や、人間界や、動物や、地獄などのいずれかの境界に生まれるとされています。つまり、私たちは人間だけではなく、天の神々の世界や、動物、地獄など、様々な境遇に生まれる可能性があり、そのことを考えれば人間としていのちを受けることは、確率としても珍しいことなのだ、稀有なことなのだということが「人身受けがたし」ということです。人間として生まれることは非常に難しいことであり、稀なことなのだということが、この三帰依文の１つの押さえということになります。またこのことは同時に、人間以外の生類、例えば動物たちに生まれることもあり得るのだという考え方をみんなが共有するということになりましたし、人間のいのちと、動物たちのいのちの間に決定的な違いを設けないような見方を育んだと言えるかもしれません。何年か前に「セブン・イヤーズ・イン・チベット」というチベットを題材にした映画がありました。その映画の中でも、ミミズを殺そうとしたら、それはご先祖様が生まれ変わっているかもしれないから駄目だというような話が出てきたと思います。なお仏典では、人間として生まれること自体が、確率的に極めて希少であることをいろいろな喩えを用いて教えています。数千年に一度しか花を開かないとされる優曇華の花とか、盲亀浮木の譬というものなどがございます。そのような喩えを用いて、人間としていのちを受けることは大変に珍しいことなのだという考え方が基本的にはあったと思います。

ところで、人間と動物のいのちの間に大きな差異を見ないにもかかわらず、なぜ人間に生まれることが尊く、優れていることだと考えるのかと申しますと、仏教では元来、人間だけが、仏になることができると考えたことが関係していると思います。輪廻の世界観では、人間の世界よりも神々の世界の方が上なのですが、神々の世界から直接仏になることはできません。神々の世界に生まれた方も最終的には、人間に生まれてからでないと仏になることができないということが書かれていたりします。そういう意味で、人間として生まれることは、仏になる可能性を手に入れるという意味で尊いのだということがあるの

だろうと思います。

次の「仏法聞き難し、今すでに聞く」に進みたいと思います。仏の教えを聞くということは、大変に難しいことである、しかし、いますでに聞いていますよということです。この点は、最後の2行のところにも、「無上甚深微妙の法は、百千万劫に遭遇（あいあ）うことかたし。我いま見聞し受持することを得たり」と再確認されています。三帰依文に触れるということは、すでに仏法に触れる縁を得たということです。これは本当に尊いことであると感謝の気持ちが生まれることは自然の成り行きでありましょう。ただその前に、なぜ仏の教えに出遇うということが、それほどに意味のある事なのかということです。このことについては、次のように答えることができると思います。生老病死に代表される様々な苦（思い通りにならないこと）に日々煩わされ、悩まされているわけですが、それらを克服すること、仏教用語では苦滅と申します。それは、涅槃、解脱、悟りといってもいいかと思います。現代的に表現すれば、苦しみが無くなるということは、幸せになるということになろうかと思います。先ほどの保呂先生の言葉で言うならば、「仏のいのち」ということにも関連して来るのだろうと思います。これが仏教の最終的な目的に他ならない訳であります。人間としてのいのちを受けて、仏の教えに出遇って、究極的な幸せを実現するために、いまのいのちを頂いているのだと考える。これが大事なことではないかと思います。つまり、なぜ仏の教えに出遇うということが有り難く喜ばしいことになるのかといいますと、仏の教えに出遇うことによって、我々が様々な苦しみを克服する、乗り越えていくという縁を頂いて、究極的には苦しみから解放されていくという道が開けてくるからということになります。ですから仏の教えに出遇うということは、尊いことなのだと考えていいかと思います。

では次に参ります。「この身今生にむかって度せずんば、さらにいずれの生にむかってかこの身を度せん」という箇所です。「この身今生」というのは、このいのちということです。「度す」というのは、救うというほどの意味です。いま戴いているこのいのち、現在の生において究極的な幸福、仏教用語を用いれば悟り、涅槃ということですが、こ

の身において究極目標を達成できなければ、一体いつそれを行えるというのか、という問いかけがこの文章であります。すなわち、仏教に出遇って究極的な幸福を実現するために、今のいのちを無意味に過ごさないで欲しいという切なる願望が込められているかと思います。ここまでが１つの区切りです。

そしてもう１つ大事な点は、「大衆もろともに至心に三宝に帰依したてまつるべし」という箇所です。「大衆」とは、みんなという意味です。これらのことは自分一人に限定されるべき事柄ではなく、他の多くの人々も自分と同じように、仏教から見た究極的な幸福をいまこのいのちにおいて実現してほしいという、まさに仏の慈悲に根差した他のいのちへの配慮を読み取ることができると思います。この点は三帰依の中の「まさに願わくは衆生とともに」と記されている箇所にも見られます。「衆生」というのは、人間も含めた全てのいのちということになります。自分だけが究極的な幸福を目指していくのではなくて、多くのいのちと共々にということが繰り返されているということです。ここは非常に大きな意味があるのではないかと思われます。

以上のことを、要約いたしますと、三帰依文から教えられる仏教のいのち観とは、今いただいているこのいのちとは、仏法を縁として究極の目的を実現するべく、懸命に努力するためにこそ、意味のあるものであるが、同時に他のいのちにもそれを促し、共々に歩もうとするいのちでもあるということになるのではないかと思います。

司会

石上先生には、大変分かり易く仏教のいのちの見方について、三帰依文の内容を取りまとめていただきました。それでは、次に仏教の立場の中でも特に浄土真宗、親鸞聖人の明らかにされた仏教の立場からどのようなことが言えるのか、渡邊先生からお願いしたいと思います。

渡邊了生氏

「浄土教・真宗から見たいのち」ということで、特にここでは保呂先生も問題にされておられました尊厳ということを取り上げてみたい

と思います。資料には「いのちの尊厳と、仏教・真宗にいういのちの平等」という言葉を挙げさせて頂きました。こちらの『仏教文化研究所紀要』第10号に小川一乗先生の「仏教からみたいのち」という論考が掲載されていますが、同様のことが真宗においても語られているのだということを定義としてまずは見ていきたいと思います。

小川先生は、縁起として生かされているいのちであるのだということをまず押さえられていかれます。石上先生も言われましたように、「縁起によって戴(いただ)いているいのち」ということでもございます。それをいのちの平等、いのちの連帯性というように小川先生は言われていくわけですが、様々な諸条件、これは生きとし生けるものとの関係性、あるいは互いの人間性の条件という因縁によって成り立っている縁起するいのちであると語られていくのが小川先生の所論です。

小川先生のお考えは、実は大乗仏教の祖である龍樹の中観哲学というものの考え方に立脚しておられるわけです。そしてその龍樹のものの考え方は、中国の鳩摩羅什、また曇鸞に継承されていきまして、親鸞の思想にも影響を与えてくるわけです。

そのことを資料に従い伺っていきます。親鸞は、その手紙、『御消息』の中で、いのちについて、それが「生死無常の理（ことわり）」であるのだとして、縁起に生かされている衆生のいのちである、という趣旨のことを示しています。そして、我々のいのちが縁起なるものとして無常であり、生かされているということに気づかされ、自覚せしめられていく。このことを親鸞は「信心の智慧」という言葉で表現していきます。例えば『浄土和讃』には、「有無をはなる」という表現で信心の目覚め、気づかされたあり様を語っています。「如来の光明の用（はたらき）」によって、「有無のとらわれ」から解放され、そこからいのちに対する根源的な価値観が出てくるのだと語っています。これは、仏教教理で言いますところの「平等」ということであります。分別なきように全てを見通していく、無我、縁起の道理への気づきを、親鸞は「有無をはなる」ということで示していきます。これは、親鸞が真宗念仏の信心の気づきの中で、「いのちの平等」という智慧の眼（まなこ）が開かれてくるのだということを端的に示しているということです。

つまり、真宗における信心の智慧という目覚めは、縁起として「生かされているいのち」への目覚めであり、「いのちの平等・連帯性」への気づきである。これが、「真宗におけるいのち」観の基本であろうと考えます。

「いのち」に関する「現代の諸問題の対応」ということを真宗的に考えていく時にも、縁起として生かされているいのち、そしていのちの平等への気づきということを基本なスタンスとしていくべきであろうということです。

私も、このような「いのち」に関するシンポジウムに参加したり、本願寺派が力を入れているビハーラなどにも関わる中で、様々に考える機会を与えて頂いております。そこで思いますことは、仏教や真宗において、「いのちの平等」ということを言ってしまう事は簡単なことではありますが、しかし諸問題を抱えた社会が宗教者にいま求めているものは、そのような社会の諸問題に対していかに仏教者、真宗者が答えるのかそれを教えてくれという要求であろうということです。ただ「いのちは平等」ということを振りかざして事を済ますというわけにはいかないと思います。その点では、保呂先生が言われました、パーソン論ということ、あるいは様々な層において価値観を総合的に判断して、どのような提示ができるのかということを考えていくことが仏教者であり真宗者であるのだろうと思います。そのような側面から次のような課題に対応していかなければならないのではないかと思います。

ただし、そのいのちの基本的定義、概念を教条的、絶対的価値とすることなく、あくまで仏教者、真宗者の「願い」として「あるべき」価値基準として押さえながら、現代的諸問題への対応も考えていくべきなのだろうと思います。保呂先生も仰ってましたが、「いのちの尊厳」という概念規定、言葉のうちには、必然的に「尊厳のあるいのち」と「尊厳のないいのち」という視点、社会的峻別が潜んでいるように思います。そのような、仏教的に言う人間の分別心に内在する危うさにも言及していきながら、「いのちの尊厳」「いのちの平等」という 2 つのものの考え方から、社会の諸問題に何かしらの現実的な提示をできればと思います。

資料に取り上げた死刑制度に関しましては、例えば、『歎異抄』第13

条を見てみますと、「わがこころのよくてころさぬにはあらず。また害せじとおもふとも、百人・千人をころすこともあるべし」という文言が出てまいります。縁が重なれば100人を殺すこともあるだろうけれども、縁が重ならなければ人１人殺すこともあり得ないのだと。この箇所では、善悪ということを語っていきます。さらに「さるべき業縁のもよほさば、いかなるふるまひもすべし」という結論付けもされます。ただし、だからといって、「薬あればとて、毒をこのむべからず」というような抑止という部分も語っているということです。

死刑制度に関することですから、罪を犯した者のいのちと、それを裁く側のいのちに該当するのでしょうか。罪を犯した者のいのちというのは、「尊厳のないいのち」、倫理的人間、善人のいのちは、「尊厳のあるいのち」と現代社会では理解されているようです。この２つの比較の中で、死刑制度という問題が語られていくのでしょうが、「いのちの平等」を掲げる仏教、浄土真宗では、どのように判断していったらいいのでしょうか。特に親鸞は善悪の問題を『歎異抄』後序において「善悪のふたつ、総じてもつて存知せざるなり」という言葉でも語っています。ですから、その辺りの事も考えながら、いのちの価値というものは、あるのか、ないのかということから問題にしていかなければならないのだろうと思います。

それから臓器移植に関することですけれども、ここでは現実的な問題としてで、医師による「ポイント・オブ・ノーリターン（蘇生限界点）」、脳死の判断ということがあげられます。いのちのリレーという綺麗な言葉で語られる社会的要請に対して、医師もなんとか判断をしなければならないということでしょう。これが本当にしっかりとした判断なのかどうかという問題があると思います。これは医師が「尊厳のあるいのち」と「尊厳のないいのち」を峻別していかなければならないということになっていきます。これは「Quality of Life（QOL）」があるのか、ないのかということにもなってきます。

また加えて問題となるのは、臓器売買ということです。日本人が我が子のために子供の臓器を東南アジアへと買いに行くということを題材にした『闇の子供たち』という映画もありました。脳死の人のいの

ちは「尊厳のないいのち」であり、臓器提供を受ける人のいのちは「尊厳のあるいのち」という峻別は果たしてどうなのかということでもあると思います。

次に自死に関する問題です。自死というものは、心の弱い人、精神力のない人が起こすものだと数年前まで思っていました。実は私もある女子大学で、当時いた僧侶教員からの理不尽な言動に絶えかねて、自死を考えたことがありました。追い詰められていきますと、選択肢がなくなっていって、残りは生きるのか、死ぬのかという選択肢だけが残ります。そのような精神状態になっていくわけです。こうなってくると社会的な問題で、そのような精神状態の中において、誰かがその手を差し伸べてくれれば、もっと目が、選択肢が開けてくるわけです。そのようなところから、自死ということに関してもそれなりに考えるようになりました。

「生かされているいのち」への気づきというものは、一人だけの気づきだけでは孤独の中で自死を選んでしまう場合も起こってしまいます。社会的な共有概念としてそれぞれのいのちの気づきがあれば、自死ということも止められるように思います。

このことは、安楽死、尊厳死についても関係してくることです。また、いじめと自殺ということもあります。例えば、評論家の宮崎哲也氏が、なぜ最近の若い世代が自殺へと走ってしまうのかと、インターネット上で語られていました。「人は死んだら生き返る。来世に生まれ変わる。こういう昨今のスピリチュアル、オカルトブームによる影響がでている。スピリチュアリズムが輪廻転生を肯定すると自殺する子供が出てくるのだ」とありました。これは一側面の見方かもしれませんが、このようなことを言われているわけです。来世でのやり直し、再会、生まれ変わり死に変わるという輪廻転生を肯定したら、いまの生を生きることの価値が低くなるのだということも指摘されています。

そのようなことを真宗僧侶の立場から見るならば、東本願寺の方からはあまり言われませんが、西本願寺の方からは浄土観を示す言葉として「倶会一処」という言葉が盛んに用いられていまして、「また出会える世界があるのですよ」ということが強調されていることと重なって見えて

参ります。いまこの娑婆世界で死に別れても、来世のユートピアのような浄土でまた抱き合える世界があるのだということですが、果たしてこれは私たちが現代の自死ということを考えた時に、どのように理解されていくのであろうかという教学の問題点があると思います。

あとは虐待、いじめということですが、この問題は、現代では、その背景として親から子供への虐待の連鎖があり、それが引き金になっていることが多いという指摘があります。この連鎖をいかに断ち切っていくのかということが重要です。真宗の僧侶においては、篤志面接員としてそのような子供たちに対応されている方々もおられます。この辺りも含めた上で「いのちの平等」をいかに考えていくのかということも課題になってくるのだろうと思います。

司会

渡邊先生からは、浄土真宗の立場から見たいのちの問題についてお話をいただきました。浄土真宗も仏教ですから、基本的には仏教の縁起として生かされているいのち、様々な因縁によって成り立っているいのち（「縁起するいのち」）ということが基本であるということでした。その縁起するいのちから、平等なるいのちということもお話しいただきました。しかし、現代社会においては、「尊厳のあるいのち」と「尊厳のないいのち」といういのちの見方が存在し、その見方から現代的諸問題の課題を探っていかれたということです。

ここまでの先生方のご発言をお聞きになって、青木先生何かコメントを頂けますでしょうか。

青木新門氏

私は今まで聞いておりまして、一般の方が使っておられる「いのち」ということは、ほとんどが個のいのちであるように思います。つまり、生まれてから死ぬまでのいのちです。それに重点が置かれているような気がしてなりません。私などが使っている「いのち」というのは、無量寿のいのちのことを言っています。ところが葬式の現場などでも、私が初めてやったころは、無量寿である御本尊を中心に斎壇が飾られ

ていたのが、いつのまにか個のいのちといいますか、遺影写真中心の斎壇に変化していきました。カラー写真で、一番元気であった頃の写真が中心に飾られ、宗教は排除されていき、告別式、偲ぶ会、お別れ会などという表現に変化していきました。それは個のいのちが生きていた時のことを思い出したり、偲んだりするわけで、生前何を成し遂げたかによってその会の大きさが変わってくるということです。生きている間に成し遂げたことが重要になってしまって、いのちなどどこへ行ってしまったか分からない具合です。お通夜などは、いのちのバトンタッチ、つまり生ある者と死を迎えた者との語り合いの場であったものわけです。しかし、今日のお通夜は、告別式よりもお通夜に出席すればいいといった具合で、バタバタと人が出入りする状態で、一向に語り合う場にはなっていないわけです。そして、世の中のパラダイムそのものがおかしくなっているのではないかと思います。

例えば、尊厳という問題に関しても同じです。私が文学を志すきっかけになったのは、吉村昭先生です。ところが吉村さんが亡くなる時に、カテーテルポートも抜いて、点滴も抜いて、奥様の津村節子さんと娘さんの前で、「俺死ぬよ」と言って亡くなっていかれました。そのことが読売新聞のトップに「壮絶な尊厳死吉村昭死去」という文章が書かれてあります。確かに壮絶であるかもしれませんが、私は尊厳死であるとは思いませんでした。自分のいのちは自分の物だから、自分がどうしようと勝手じゃないかという自殺に近いと思います。それがなぜ尊厳死といわれるのか。私はそのように思いました。

12年間も自殺者が3万人を超えて、なおかつロシアに続いて世界第2位の人口対比自殺率です。そのような国になってしまっています。にもかかわらず、太宰治にしろ、有島武郎にしろ、芥川龍之介にしろ、川端康成にしろ、江藤淳にしろ、三島由紀夫にしろ、吉村昭にしろ、全部自殺じゃないですか。私は文学や知識では、絶対に少年たちを育てられないと思います。子供たちは大人の背中を見て育っているわけです。そのパラダイムをシフトしないと。作家だと自殺は許されるのでしょうか。人格と才能は違うものです。その辺りの事を非常に感じるわけです。

司会

青木先生からは、具体的な問題として、「個」のいのちという視点と自死に関わる問題を取り上げていただいたと思います。果たして「いのち」というものは、自分のものとして考えていいものだろうかということ。この考え方と自死ということは非常に深く関わっていることだと思います。このようなことに関して、仏教の立場からどのようなことが言えるのでしょうか。

石上和敬氏

「因縁によって生かされているいのち」ということは、仏教の中でよく使われるフレーズです。これは保呂先生が先ほどお話下さいました、「個のいのち」と「個を超えたいのち」ということとも関連するかと思います。例えば、先祖からの縦の連続として、また環境や生態系などの横の繋がりとして、様々な関係性によって、つまり、因縁によって私たち人間は生かされているのだと。このことは何も仏教に限らずとも言えることだと思います。しかし、仏教の立場からもう１つの視点を付け加えるとするならば、様々な因縁によって生かされている私だけれども、ご縁は頂くばかりではないということです。自分自身が周囲や後の世代の人たちに様々な縁を与え続けていくということにもなるわけです。「因縁によって生かされているいのち」ということを考える場合、ご縁は頂きながら、自分が意識する、しないは別として、様々な縁を周囲に与え続けているという視点もはずすことはできないのではないかと思います。

司会

石上先生は、先ほどのご発表で、時間の関係上、途中で省略されていたわけですが、資料の中に、「現代の諸問題、特に自死、いじめ、虐待に関するヒント」ということで、苦諦ということと、不二ということを挙げておられます。この辺りについても少しコメントを頂けますでしょうか。

石上和敬氏

仏教に四諦という教えがございます。四諦は、４つの真理とか、４つ

の原理とか言われるものです。この一番最初に、人生というものは苦に満ち満ちているというのがあります（苦諦）。その場合の苦は、先ほど申し上げたように、「思い通りにならないこと」ということです。私たちの人生というものは、思い通りにならないことにあふれているのだということです。最近の若い学生さんなどには、お金があれば何とかなるんじゃないかというような意見もありますが、しかし、そのような考えの人でも、いわゆる四苦八苦はあるわけです。四苦八苦とは、生・老・病・死、愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五蘊盛苦のことで、どれだけ時代が変化しても、私たちの思い通りにはならないわけです。いうならば、苦の代表選手とでも言いましょうか。その押さえがこの苦諦ということです。

これは、自死問題に取り組んでおられる僧侶の方々がいつも仰っていることですが、自死を選ぶ人々をいかに減らしていくのかということについて、「安心して悩むことのできる社会」をみんなが目指していったらいいのではないかということです。つまり、様々な悩みや苦しみがあるということを否定的に考えるのではなくて、お釈迦さまが仰っているように、様々な苦悩のあるところから出発していくのだということ。苦しみや悩みがあることは異常事態ではなく、誰にでもあるあたり前のことなのだということを、当事者も周囲も広く共有していくということが出発点になるのではないかと思います。

司会

「安心して悩むことのできる社会」を実現していく。逆に言えば、安心して悩むことのできない社会に私たちは生きているわけです。私が最近読んだ自死に関する資料の中には、渡邊先生も先ほど仰ってましたが、心の弱い者が自死するのではないということです。自死を決意する時は、鬱になっていると。ならば、鬱にならないような社会を実現していくということが必要であると語られていました。

この辺りのことは渡邊先生、いかがでしょうか。

渡邊了生氏

まず、いのちというものは、自分の物なのかということですが、仏教や

真宗では、もちろん「生かされているいのち」ということですから、自分の物ではないということになります。ここに立たなければならないことは事実です。このような事実は、日頃の生活の中で、魚や豚や牛のいのちを食べながら生きているということを考えれば、自ずと気づかされることであろうと思うわけです。しかし、現実的な問題として、安楽死、尊厳死というものが、語られているということですし、アメリカやオランダやスイスという国々などでは、安楽死や尊厳死を認めているという傾向にあるわけです。この尊厳死や安楽死の場合は、特に健康問題に悩まれて、自死をされるということでもあります。これは日本の状況でも同じでして、平成21年の自死の原因は、やはり健康問題です。健康問題ということは、石上先生も仰っていましたけれども、生老病死の「生」というところに帰結していくことでしょうし、自死も「病」という視点で見ていったところにおいて、仏教・真宗から苦諦を乗り越え、滅諦にいかに至るのかということを説いていくことが重要であろうと思います。ただ、一人ひとりが気づいたとしても、人間は弱い生き物でして難しい場面も出てきます。例えば、東本願寺の女性僧侶の方がインターネットで、自分の娘さんが自死されたことに言及されておられました。娘さんは、浄土真宗で生きておられる方ですから、既に「生かされているいのち」ということを知っていたわけです。にもかかわらず娘さんは最後に自死を選んだ。自死というのは、社会的な問題でありながらも、最後には個的な部分で苦しんでいくということもあるだろうと思います。全ての人がいのちの気づきというところに立ったとしても、なかなか難しい現代的な問題であるなと思います。

司会

保呂先生は、何かこれらの点についてございませんでしょうか。

保呂篤彦氏

青木先生のお話を伺っていて考えたことがあります。定員オーバーの救命ボートに乗っていて、誰かが降りなければならないのだが誰も降りようとしない。その時に、イギリス人に対してならば、あなたが紳士ならば当然飛び降りることを選びますよ、と言えば飛び降りる。アメリカ

人であれば、あなたはヒーローになれますよ、と言えば飛び降りる。ドイツ人であれば、それが規則ですから、と言えば飛び降りる。では日本人だったらどうか。日本人であれば、みんなそうしていますよ、と言えば飛び降りると。そのような笑い話があります。日本文化の中には、確かにそのような意識を形成する傾向があるのだと思います。

明治以降、日本は欧米の文化を取り入れていく時に、日本には「個」の文化がまったくないじゃないかと言われて、「個」を確立していくことが重視されたという経緯があります。一流の国家になるため、国民に「個」を確立させよ、というのが至上命令になったのだろうと思います。

青木先生が仰ったような人々は、日本を代表する知識人、まさに日本のエリートですから、「個」の確立ということを最も強く求められてきた層だと思います。そのような知識階級だからこそ、「個」を確立すべしという至上命令が、「個」である私の「いのち」だからこそ自ら死を選択するのだという態度を取らしめる大きな要因になっているのではないかと思います。しかし、それが本当に「個」の確立なのかということを感じます。皆がするからといった仕方とはまったく違う仕方で個と個がしっかりと結びつくような人間同士のあり方、そのようなしっかりとした人間関係の中でしか本当の「個」も確立しないはずなのだけれども、それが日本ではあまり成功していない。「個」を確立していく中で、「個」の「いのち」なのだから自分の選択によって自死も選択しうるのだという歪んだ個人主義というものが形成されてきてしまったのではないかと思います。

司会

保呂先生から、日本においては個が歪んだ形で確立されているのではないかとご指摘を頂きました。では、少し強引かもしれませんが、私たちはこのようないのちの感覚でこの社会を生きていいかなければならないならば、いったいどのような方向性を考えていかなければならないのでしょうか。渡邊先生、いかがでしょうか。

渡邊了生氏

原則論に戻ってしまうのですが、やはり「いのちの平等」ということに、

一人ひとりが気づいていくことしかないように思います。ただ、社会的なところで求められるのは、「尊厳あるいのち」か「尊厳のないいのち」かという事でしょうから、そのような社会の中にあって、仏教者、真宗者が、何を提言できるのかということが問題になるのだろうと思います。

司会

では、「いのちの平等」ということを現代社会の人々に気づいて頂くには、どうしたらよいのでしょうか。仏教の原則論というものは、日本ではきっと多くの人がご存知だろうと思います。それをご存じないという方が多数派の社会であるならば、どうすれば「いのちの平等」を理解してもらえるのでしょうか。

渡邊了生氏

最近、小学校などにおいても、ニワトリの卵から雛を孵して、それを育てて、最後は食すということが行われています。様々な意見があって、批判もあるようですけれども、実践的には、そのような場面でいのちとは、いのちの平等性とはということを考えていくことになるのだろうと思います。そこで仏教的ないのちの価値観が備われば、悪い事ではないように思います。

司会

石上先生、仏教（学）的視点から、このことに関して何かご意見を伺えればと思いますが。

石上和敬氏

私も原則的なことばかりですが、資料に書かせて頂いた「不二」ということを少しお話しておきたいと思います。現代社会の悩みや苦しみの多くは、人間関係に関わることが非常に多いという事はよく指摘されるところです。その場合、仏教の慈悲ということが１つの切り口になってくるのだろうと思います。「不二」というのは、資料にも書きましたが、自分と他者を切り離して考えることはできないということです。先ほど

の縁起ということです。大切なのはやはりここではないかと思います。例えば、慈悲などを考えてみますと、慈悲の悲は、共に悲しむという事です。誰かが悲しんでいれば、自分も共に悲しむということが本来の意味です。家族とか近親者が本当に悲しんでいるならば、こちら側も共に悲しくなるということは当たり前のようにあるわけですから、そのような発想をより広く持っていくという事が身近にできる実践ではないかと思います。私には関係がないことはないのだというように考えて、自分が会った人たちには、そのような眼差しをもって生きていくという事が重要になってくるだろうと思います。相手の問題は自分の問題、自分の問題は相手の問題、相手の幸福なくして自分の究極的な幸福はあり得ないというような表現は、『維摩経』などに登場する有名な教説です。

司会

それでは、保呂先生、どのようにお考えでしょうか。何か具体的な提案はございますでしょうか。

保呂篤彦氏

やはり具体的な提案というものは思いつきません。今の日本では、例えば、両親が自分たちの死後に子供たちに対して迷惑が掛からないように様々な準備をしているとか、親が子供に随分と気を遣っています。親と子の関係もそのようですから、周りの人間に迷惑をかけないようにしよう、迷惑をかけないこと、かけられないことが幸せなのだという感覚を私たちは持っているように思います。実際に迷惑をかけられたら、やめてくれよということになるのでしょうけれども、しかし互いに迷惑をかけてよい世界をどのようにして作り上げていくのか。そのような見方にどのようにしたら変えていけるのか、その方途が具体的にはすぐに思い浮びません。

司会

では、最後に青木先生、ご意見をいただけますでしょうか。

青木新門氏

佐世保であった女児殺人事件の加害女児は、「リセットしてまた生まれ変わればいいのに」と言ったと調書には書かれています。というのは、先ほど仰ったように、子供たちが手にする漫画の本とか、ビデオとか、ゲームというものは、生まれ変わり死に変わりするものの考え方がベースになっているわけです。ボタンを押して生まれて、ボタンを押して死んでという世界です。そのような世界が現実と一緒になってしまって、調書に書かれているようなことを発言したのだと思います。実はそのような延長線上に、丹波哲郎さんだとか、細木数子さんだとかがいるわけです。それを仏教では「有見」というわけです。一方、知識人や、作家と言われているような人たちは、死んだら何も無いよというように「無見」という延長線上にいるのだと思います。吉村昭さんも死んだら何もないよと発言しています。

浄土真宗では、「正信偈」の中で「悉能摧破有無見」という言葉に触れます。また、先ほども紹介されましたが、『浄土和讃』では、「光触かぶるものはみな　有無をはなるとのべたまふ」と言っているわけです。この有見か無見かという世界の中に日本中の人は住んでいるわけです。そうなると、釈尊が言った言葉や、親鸞が語った言葉というものは、この世界に全く伝わっていないという事になるわけです。ですから、人生最高の幸せというものは、生涯を通じて安心に生きることですよ。生老病死の全てを安心して生きる。それ以外にありません。昭和63年の「厚生白書」などは、人生80年の時代に来るのだから、50歳までの幸福であった時代をそのまま延長し得る世界を構築しようといって厚生省は旗を振ったわけです。そうなると民間もそれに乗らなければなりませんから、医療機関は延命主義を語り、雑誌社は「いきいき」とか「ゆうゆう」というようなものを創刊する。旅行会社はフルムーンだとかのツアーを組む。散歩の仕方から、老後の性生活にまで及んで商品化していったわけです。そうして生まれたのは、ゲートボールしながら元気に生きて、最後はコロッと死んでいきたいという人々が増えてきたわけでしょう。私は、何を言っているのだろうかと疑問に思ってしまいます。飛行機だって、着陸態勢に入って、しっか

りと着陸していくところに美しさがあるわけでしょう。秋の紅葉が美しいのは、気候変化に適応しているからですよ。それを春の新緑を身にまとったままコロッと死にたいなんて、まったく矛盾している社会になっているとしか思えません。生きることにだけ価値を置いてしまっている今日の社会が、様々な諸問題を生み出していると言っていいと思います。私はそのように思っています。

司会

青木先生、ありがとうございます。いのちとか、いのちの尊厳について考える時には、先生方のご発言にありましたように、様々な相があるということを自覚する必要があるということです。私たちがいのちということについて考える場合、現代社会では、核家族化の影響も大きいのだろうと思いますが、体験として死に出会う場面がないというところから、断片的にしかいのちが見えないという事があるのだろうと思います。青木先生のお話にもありましたように、本木雅弘さんがインドのベナレスにあるガンジス川のガート（河岸の沐浴場）で、誕生を喜び沐浴している人がいるかと思えば、その横で次から次に荼毘に付されている人がいるというように、人間の一生涯をそこで見たのだということでした。そのような人生の縮図といいますか、そこで人生そのものを目の当たりにすることによって、感じられる世界があった。つまり、トータルに人間のいのちということを考えるという事が、私たちになければならないことなのだろうと思います。そのような社会に現実はなっていない。仏教というのは、トータルに「人生」としてのいのちを見つめる鏡の役割を果たす教えだと思います。

最近、私が読んだ本の中でご参考になればという本を一冊ご紹介しておきたいと思います。よくテレビにも出演されている立教大学の香山リカさんという心理学者がお書きになった『悪いのは私じゃない症候群』です。タイトルで大体何が書かれているのか分かりますが、その中に今日も話題になりました、スピリチュアルな話題も取り上げられています。そこには、現代社会に生きる私たちは何でも他人のせいにするということがあるのだと書かれています。悪い境遇に遇えば、

前世が悪いからだとか、運が悪いからだとか、自分の努力が足らなかったという事ではなくて、全て何かのせいにする。占いがブームになっているのは、そのようなことも関係しているのだと思います。つまり、本当の自分や世の中の現実と正面から向き合おうとはしない、向き合うことが怖いということになってしまっているわけです。このようなことでは何も解決しないという事を、宗教、特に仏教は教えているのだろうと思います。

「人生は苦なり」という現実をしっかりと受け止めながら、それでも悩みながら生きていけるのだという事を、他の人びとと共有していけるような社会の実現を目指すというようなところから、現代におけるいのちの問題というものに対する解決の方途が見えてくるのではないかと思います。

シンポジストの先生方には大変示唆的なご意見を頂戴したことを心より感謝申し上げます。会場の皆さまもありがとうございました。

以上をもちまして、シンポジウムを終了させていただきます。

注

①「いのちのバトンタッチ－映画「おくりびと」によせて－」(『岐阜聖徳学園大学仏教文化研究所紀要』第11号 pp.23-58)

岐阜聖徳学園大学　仏教文化研究所開所10周年記念式典
2010年10月27日（水）
於　岐阜聖徳学園大学 岐阜キャンパス 多目的ホール